

長崎ば、さるかんね 2

—2013（平成 25）年度「地理学研究」の覚え書き—

香川貴志

（京都教育大学）

Let's Walk around Nagasaki (Part 2)

—A Memorandum of Field Trip in Nagasaki and Saga—

Takashi KAGAWA

2013 年 11 月 30 日受理

抄録：本論文は、隔年開講の前期集中科目「地理学研究」のシラバス設計、受講者予備登録、事前学習、フィールドワーク、事後レポートの分析を盛り込んだ備忘録である。今回は端島（軍艦島）への上陸に加え、長崎の地域振興に大きく寄与して定着をみた「長崎さるく」を現地体験し、さらに教員を志す学生が大半であるという大学の特性に鑑み、ESD（持続可能な開発の教育）をテーマとした日本地理教育学会（佐賀大学で開催）のシンポジウムにも一同で参加するなど、多彩な内容の授業となった。

キーワード：地域振興、長崎さるく、日本地理教育学会、地歴融合、長崎、佐賀

I. 現地実習地域の選定コンセプトと本稿の目的

今年度は、国際地理オリンピック京都大会と国際地理学会京都地域大会が 7 月下旬から 8 月上旬にかけて開催されたため、これら両者に関わった担当者（香川）の都合により、本授業科目は例年の開催時期とは異なった 8 月下旬の実施となった。そのため、期間中に佐賀大学で開催される日本地理教育学会のシンポジウムに参加すべく地域選定を始め、そこに産業遺産としての端島訪問と地域イベント「長崎さるく」（「さるく」は長崎の方言で「歩く」「めぐる」の意）の定着状況の体験を加え、長崎と佐賀を現地実習の対象地域に定めた。

現地フィールドの多くを占めたのは長崎である。そのうち最初の訪問地である端島は「軍艦島」として名を馳せており、かつて良質な瀝青炭を産する海底炭田の拠点として栄えた島である。産業学習では大変に有意義な教材となり得るうえ、端島における雇用形態が管理職から日勤（日雇い労働者）に至る階級的なものであったことに触れれば、日本の産業発展を支えた暗部を照射し、人権問題学習に展開させることも可能である。

地域イベント「長崎さるく」の現地体験は、特に小学校社会科における地域学習、中学校社会科地理的分野や高等学校地理歴史科の地理における地域調査で必要とされる、地域観察の視点を磨くことに有効な経験となることが期待される。とくに地域をより良くするための課題の模索は、日本の地理教育では受験準備との関係から授業で扱うことは難しいものの、教える側の教師が身に付けておくべき必須の能力である。

さらに、地理教育に関わる学会で ESD を主軸としたシンポジウムに参加することは、成熟社会や少子高齢社会と呼ばれる現代において、とくに中学校社会科地理的分野や公民的分野、高等学校地理歴史科の地理や公民科の現代社会を担当する教師が備えておくべき能力の啓発につながる。従来の本授業科目では実施経験のない学会出席を加えた成果も記し、今後のコース設計の礎とするのが本稿で最大の狙いである。こうした備忘録は 2002 年度実施分以降、不断に継続してきた（香川 2003, 2005, 2007, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013a）¹⁾。ただ、紙幅の都合もあり、2012 年以前の書誌情報については、香川（2013a）の文献欄を参照していただきたい。

II. 事前学習会の実施、および文献研究の新しいかたち

新学期の開講と同時に始めた予備登録では、学部「地理学研究」が 19 名、大学院「人文地理学特論」が 5 名

の受講希望者を集めたが、最終的には「地理学研究」の受講生が 16 名（国語領域 4 回生男子 1 名、社会領域 4 回生男子 1 名、同 3 回生男子 7 名、同 3 回生女子 3 名、同 2 回生男子 4 名）、「人文地理学特論」の受講生が 4 名（大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修の修士課程 1 回生の男女各 2 名）となった。

今回の現地実習の日程は、前章に記した理由により 8 月 22～24 日とした。このうち 22 日を 6 時間（3 コマ）、23 日を 8 時間（4 コマ）、24 日を 6 時間（3 コマ）の時間設定としたため、計 10 時間（5 コマ）の事前学習が必要となる。そこで、その第 1 回を 6 月 9 日（日）の午後に 4 時間、第 2 回を 6 月 16 日（日）に 4 時間、第 3 回を 7 月 20 日（土）に 2 時間それぞれ実施した。土日に事前学習会を実施するのは、ウィークデーに教育実習や教員採用試験にかかわる事前学習会やセミナーの開催が多いため、この方法は既に定着をみている。

事前学習会では、原則的に受講生全員に出席を義務付け（同時開講の大学院「人文地理学特論」の受講生を含む）、学部学生については一人 1 本の論文紹介をさせた。対象となる論文は、筆者（香川）があらかじめ選定したリストから選ぶか、5 ページ以上の長さのものを受講生が自分で探す必要がある。

紹介する論文を決定した段階で、受講生は香川研究室前のクリップボードに掲出した表にそれを書き込む約束になっている。これは、他の受講生との重複を避けるための措置である。論文紹介は香川（2013b）で効果が実証された方法を採用した。つまり、紹介する論文の長さに関わらず論旨を 181～200 字に要約し、なおかつ数語のキーワードを抽出するというものである。字数が少ないため、多くの受講生は「すぐ簡単にできる」と当初は考えるようだが、後に感想を尋ねると異口同音に「かなり苦労した」という返答が得られる。分量的に 400 字詰原稿用紙の半分で 1 行をめぐる調整が強要されるため、相当な推敲無くしては要旨を書くことができない。

事前学習会では、学部の受講生 16 名全員による論文紹介に加え、大学院受講生 1 名が自主的に論文紹介レジюмеを提出した。そこで紹介された論文は、地理学に限らず周辺領域からのアプローチによるものもあった。それらをこの研究紀要の執筆要項にしたがって著者氏名のアルファベット表記順に列記すると、堀場晶子（2004）、飯田謙一（2010）、石川雄一（2007）、田 光（2008）、神原哲郎（1995）、菊地達夫（2004）、町田俊彦（2010）、森 隆行（2012）、長岡信治・前田康秀・奥野 充（1999）、長崎市観光宣伝課（2003）、中西こずえ・南 尚志・福田恵子・中西弘樹（2003）、岡本訓明・高橋誠一（2007）、柴田弘捷（2010）、竹内清文（1969）、富山哲之・矢ヶ部和洋（2005）、王 維（1998）、山野明男（2007）の 17 点になる²⁾。

文献紹介のレジюмеは、学部受講生全員に対して第 1 回事前学習会の前日深夜までに必着で提出させた。方法は所定のテンプレートを受講生に送信し、書き込んだものを添付ファイルで返信させるという方法である。締切に遅れた者は全くおらず、諸連絡と同様に E メールを活用することが授業の円滑な進行に寄与するようだ。論文紹介レジюмеの仕上がりには若干の優劣が認められた。しかし、総じて程度の高い仕上がりが見られた。キーワードの抽出は、それをあらかじめ記している論文については転記を認めたものの、「○○の△△」のように冗長なものは学生自らが抽出した場合でもほとんど無かった。

Ⅲ. 現地実習の実施

1. 現地実習 1 日目—8 月 22 日（木）、晴れ、長崎市の最高気温（35.8℃、14 時）—

京都から当日の朝に新幹線で出発すれば間に合うように、集合時間は JR 長崎駅で正午とした。その際、集合後にすぐ行動に移れるようにするため、食事を済ませてから集合することにした。集合時間には全員が遅刻することなく揃った。

集合後は、出席チェックを兼ねて、香川が当日朝から先行して長崎入りして準備しておいた長崎国際観光コンベンション協会（2013）『平成 25 年版 長崎さるくマップブック』を受講生全員に渡した。宿泊先に対して事前に依頼しておいたマイクロバスに不要な荷物を運んでもらい、我われは市内電車（路面電車）で大波止停留所まで移動した。さいわい市内電車は何とか全員が同一の便に乗り込めた。大波止電停から栈橋まで歩いて、この日のメインイベントである軍艦島上陸ツアーに備えた。このツアーは 2009（平成 21）年に関係者の努力によって、一部地域への立ち入りが可能となって始められたものである。

軍艦島は、正式名称を端島といい、かつて海底炭田の拠点として栄えた島である。1974（昭和 49）年に閉山されて以来、無人島となって今日に至っている。高密度な住空間が廃墟ブームの中で脚光を浴びており、学術的に

は国内屈指の古い鉄筋コンクリート建造物群が広く知られた島でもある。現在、産業遺跡として世界遺産登録を目指しているようだ。潮風に洗われる建造物群の劣化が著しいため、世界遺産登録への道は厳しい部分も多いと考えられるものの、産業遺跡として世界でも稀なものであることは確かである。

軍艦島上陸ツアーの出港時刻は 13 時であった。そのため、大波止桟橋到着後は若干の余裕があった。この間を利用して島の概略を説明し、その際に現地では水分補給のための販売施設が無いため、飲料をあらかじめ購入しておくよう指示した。ゴミを持ち帰る必要があることは、上陸ツアーの参加者に提出が義務付けられている誓約書に記してあり、このことについては事前学習会で周知徹底済みである。

往復に各 40 分程度、上陸時間も 40 分前後という 2 時間余りのツアーであるが、長崎湾内の造船所、斜面に展開する市街地なども望めるため、効率的に長崎のエッセンスを学習することができた。2006（平成 18）年に「地理学特講」で訪問した際は、まだ上陸ツアーが無く周遊ツアーだけであった（香川 2007）ため、筆者自身が上陸は初体験である。この日は少し波があったものの無事に上陸を果たせ、我われも全員が見学ルートに従って島内を歩いた。翌日は波が高く接岸できなかったと後日聞いた。上陸できた我われは幸運だった。軍艦島上陸ツアーに関しては、その改善点をレポート課題の一つとした。その概要については次章で触れる。

大波止桟橋に戻ってからは、日蔭が少ない端島（軍艦島）での体力消耗に配慮して、宿舎のバスに桟橋まで迎えに来てもらう手配をしておいた。当初は、全員で揃って出島に行く予定を立てていたが、最終の第 3 回事前学習会（7 月 20 日）の直前、宿舎へ直行するよう変更した。公共交通機関の運賃を節約できたのは幸いだった。

宿舎に着いてからは、部屋割り、夕食および翌日の予定を伝え、入浴時間をとった。これまでの経験から、夏季の現地実習では食事前に入浴時間を取った方が清潔なうえ、夕食の際の食欲も進むようである。夕食時には翌日の市内で実施するセルフエクスカーションの際に利用する路面電車の日乗車券を配布し、長崎市街地の構造や特徴について筆者（香川）が概説したのち、宿舎の方からも現地実習に相応しい見どころを紹介していただいた。事前学習会で比較的幅の広い論文が紹介されていたため、受講生の理解に支障は無かったように見受けられた。現地実習では、事前学習の有無が現地行動の成否を大きく左右する。

2. 現地実習 2 日目—8 月 23 日（金）、雨のち晴れ、長崎市の最高気温（32.1℃、14 時）—

この日は朝食から自己判断で自由に摂り、第 1 日目の集合時に配布した『平成 25 年版 長崎さるくマップブック』をもとに各自でプランを立案し、個人またはグループで「長崎さるく」を体験させた。学生たちが訪問した場所、そして各訪問地点に対する評価については次章で詳述するが、もっとも多くが訪問したのは長崎原爆資料館であった。長崎を対象とした修学旅行の特徴を事前に説明したことも影響していよう。長崎原爆資料館は、いわば平和学習の聖地の一つであるため、教員希望の受講生が大多数を占める現状からすれば、修学旅行を引率してのイメージトレーニングがなされた可能性もある。ただ、長崎への原爆投下をめぐって歌い継がれた「長崎の鐘」のモデルにもなった、永井隆ゆかりの如己堂や長崎市永井隆記念館を訪れた者は少なかった。

夕食の開始時刻に指定した 19 時までに宿舎に戻り、適宜入浴も済ませておくよう連絡していたが、筆者が不覚にも外出先に忘れ物をしたため、教材研究のために特別参加してくれた京都教育大学大学院教科教育専攻社会科教育専修の修了生である井上明日香氏（神奈川県立元石川高等学校教諭）に依頼して、反省会を兼ねた宴席を先に始めておいてもらった。結局、筆者は約 10 分遅れて夕食会場に行けたものの、肝心な場面での失態は初めてであり、集中力を持続させることの難しさを実感した。宴席で受講学生に適宜尋ねると、「長崎は想像以上に素晴らしい都市だった」「明日、佐賀に行くので心残りが大きい」「教職に就けたら修学旅行で児童・生徒を連れてきたい」という高い評価が数多く得られた。宴席では、受講生に未成年の者も居たため、飲酒に関して厳正な事前注意を怠らなかった。もちろん該当する未成年の学生たちは約束を守ってくれた。

3. 現地実習 3 日目—8 月 24 日（土）、雨、佐賀市の最高気温（29.6℃、12 時）—

長崎市の宿舎（風頭山の矢太楼）を 9 時前に借上バスで発ち、長崎芒塚インターチェンジ（IC）から長崎道に入り、途中の川登サービスエリア（SA）で休憩し、11 時少し前に佐賀大和 IC に至った。川登 SA から佐賀大学の五十嵐勉先生と電話で打ち合わせをして、佐賀に到着後に乗り込んでいただく場所を決めた。五十嵐先生には、氏の同僚である山下宗利先生からの紹介による「干潟よか公園」を案内していただくお願いをしていた。

五十嵐先生には佐賀大学の近くで乗り込んでいただき、そこからバス運転手への経路指示もお願いしたので、目的地まではスムーズに移動できた。「干潟よか公園」は有明海の干潟を観察できる絶好のスポットであるが、そこに向かう途中の農地でも佐賀平野の農業や有明海干拓の説明をしていただけた。筆者の大学院時代の先輩である五十嵐先生には、現地に着いてからも説明と質疑への対応で大変お世話になった。潮の干満に関しては恵まれず満潮時であったが、天気予報では雨天であったにもかかわらず、屋外で雨に遇わなかったのは幸いだった。

「干潟よか公園」を後にして日本地理教育学会の会場である佐賀大学に向った。下車後、バスと別れて一時解散で昼食とした。このころから雨が激しくなり、雷鳴も聞こえる荒天となった。屋外での行動でなかったのが不幸中の幸いである。傘を持っていない学生も多かったようだが、雨天時に傘使用が禁止されていた初日の軍艦島訪問に備えて全員に雨合羽を用意させていたので、それで難をしのげたと後に聞いた。

日本地理教育学会はシンポジウムのみ参加であった。その詳しい状況は次章に譲るが、学生から質問も出され、相応に有意義な学会参加となった。参加費も納入したので学会財政にも少しは貢献できたと思う。

表1 自由行動時間に受講生が訪問した場所や施設の一覧(50音順)

学年(数字は学部、Mは全てM1)	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	M	M	M	M	回	1	2	3
性別(fは女子学生、mは男子学生)	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	f	f	f	m	m	m	m	f	f	答	位	位	位
学年別・男女別のシリアル番号	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	1	2	1	2	1	2	数	●	◎	◎
1 祈りの丘絵本博物館					○	○						◎									3	-	1	-
2 浦上天主堂		○	○		○													○			4	-	-	-
3 大浦天主堂		○	◎	○	◎	○	○	○				●	○		○	○	○	○	○		14	1	-	2
4 オランダ坂																○		●			2	1	-	-
5 海鮮市場(長崎港)												◎						○			2	-	-	-
6 風頭公園													●						○	○	3	1	-	-
7 亀山社中記念館										●	○	○		○	○						5	1	1	-
8 祈念坂																○					1	-	-	-
9 旧長崎英国領事館																○					1	-	-	-
10 旧松山町防空壕跡																		○			1	-	-	-
11 グラバー園		◎	●	◎	○	◎	◎	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	◎		18	2	8	1
12 グラバースカイロード				○												○					2	-	-	-
13 原爆落下中心地碑																○		○	○		3	-	-	-
14 孔子廟・中国歴代博物館		○	◎		○	◎	●	◎				○				○			◎	●	10	2	4	-
15 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館																◎	○	○			3	-	-	1
16 思案橋													○						○	○	3	-	-	-
17 シーボルト記念館										○	○			○	●						4	1	-	-
18 城山小学校の被爆校舎																		◎			1	-	-	1
19 鎮西学院碑																○					1	-	-	-
20 新地中華街		○	○	○	◎		○	○			○	○	○	○	○		○	○	○	◎	14	-	2	-
21 出島		◎		◎					◎	○	◎	○	◎	◎		◎	◎	●	◎		10	1	1	6
22 出島ワープ																			○	○	2	-	-	-
23 唐人屋敷跡																			○	○	3	-	-	-
24 中の茶屋																			○	○	2	-	-	-
25 長崎県美術館																			●	◎	2	1	-	1
26 長崎県物産館		○	○	○	○																4	-	-	-
27 長崎原爆資料館		●		●	●	●	◎	◎	◎	◎	◎	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	18	9	2	6
28 長崎市永井隆記念館・如己堂																			○		1	-	-	-
29 長崎市野口彌太郎記念美術館																○					1	-	-	-
30 長崎市歴史民俗資料館													○			○					2	-	-	-
31 長崎電気軌道(株)電車資料室																○	○				2	-	-	-
32 長崎平和資料館			○																		1	-	-	-
33 長崎歴史文化博物館																	◎			○	2	-	-	1
34 西の浜町										○	○			○							3	-	-	-
35 東山手十二番館																◎					1	-	1	-
36 東山手洋風住宅群																○					1	-	-	-
37 袋橋																○					1	-	-	-
38 文明堂総本店			○										○								2	-	-	-
39 平和公園		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○			14	-	-	-
40 南山手レストハウス																○					1	-	-	-
41 ミュージアムレストラン 銀嶺																		○			1	-	-	-
42 眼鏡橋			○														○				2	-	-	-
43 吉宗																		○			1	-	-	-

凡例: 訪問地に○、「一番良かった」訪問地に●、「2番目に良かった」訪問地に◎、「3番目に良かった」訪問地に◎を施した。

5人以上の訪問を得た場所については施設名等に網掛けを施した。

(資料) 事後教育レポート課題をもとにして筆者作成。

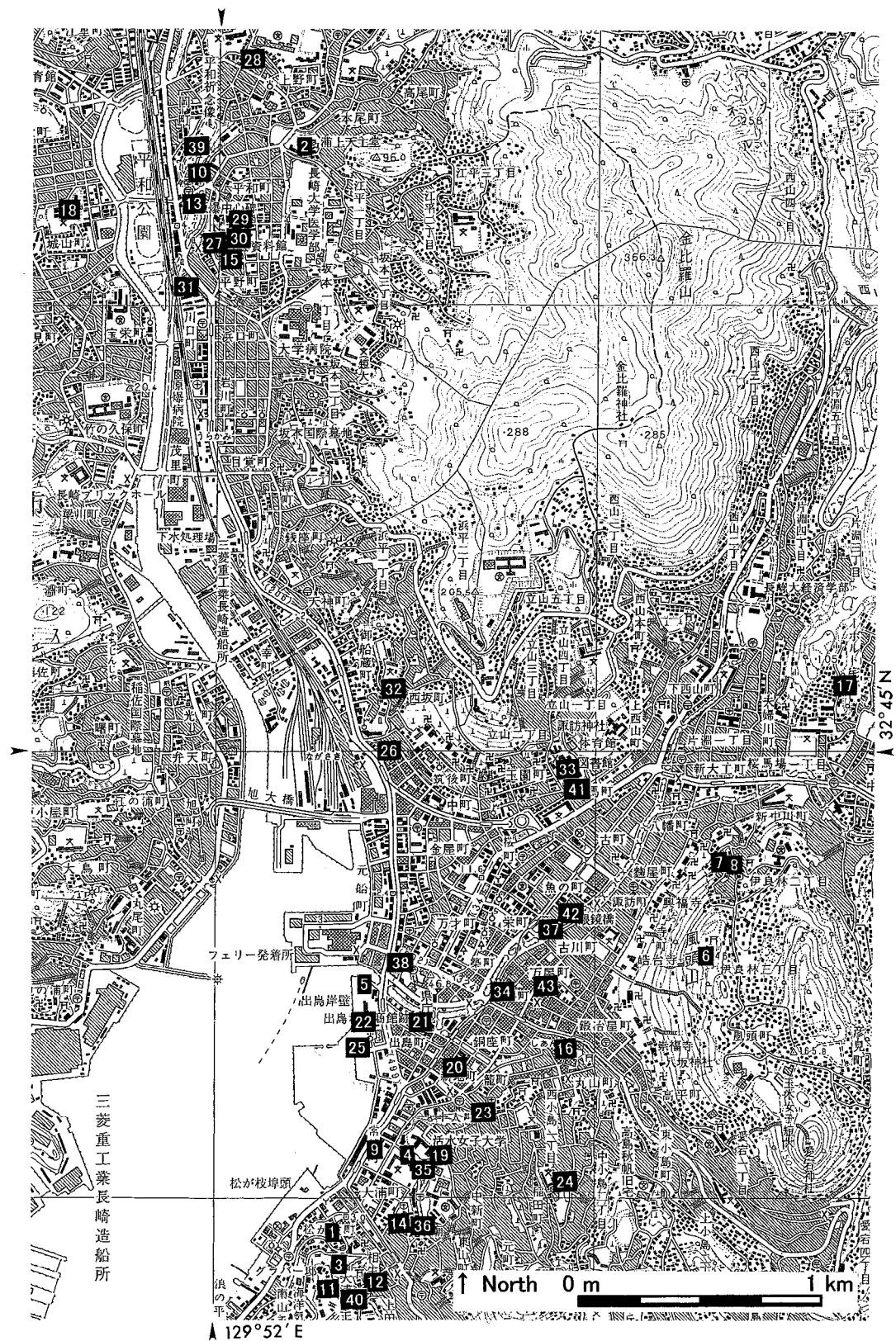


図1 自由行動時間に受講生が訪問した場所や施設

(国土地理院 1/25,000 集成図「長崎」平成 12(2000)年 5 月 25 日発行を原図として筆者が加筆)

注) 図中の■(白抜き数字)は、表 1 に示した場所や施設の番号と対応している。

IV. 事後学習課題の分析から見えてくるもの

現地実習を伴う集中実施科目では、2泊3日の現地行動だけでは所定時間数を満たすことが困難であることに加え、事前学習と事後学習を入念にしておかなければ得るものが少なくなる。今年度の事前学習については既に第Ⅱ章で述べたので、本章では事後学習として提出を課したレポートについて述べる。レポートは4つの課題からなるが、2つ目の課題は3つの小課題から構成されている。論述で書かせる課題については最小字数と最大字数を決め、長短が過ぎる回答を排除した。

レポート課題は初日に長崎駅で集合した際にプリントで配布した。フィールドに出ている間に紛失する者がいるといけなないので、初日の夕食時のミーティングで同じものを再度配布した。また、回答のためのレポート用紙は、整理のしやすさを考慮してテンプレートを受講生全員に送信した。

1. 端島（軍艦島）上陸ツアーをめぐるレポートの分析

端島に関するレポート課題は次の1点である。「上陸ツアーのウィークポイント（短所）とその改善策の提案を181字以上、200字以内でまとめてください。」

この課題については、改善策を以下に整理する。なお、複数の改善策を示した回答が一部にあるため、改善策の総計は22件ある。最も多く挙げられた改善策は「安全に配慮しながらの見学ポイントの拡充」や「見学できないポイントのモニター等での案内」という、観察対象の拡大に関わる提案で10件に及んだ。ちなみに現在の見学ポイントは、島内南端～南西端部の3箇所に限られる。

「日陰を増やして熱射病対策を図る」という改善策も6件寄せられた。現在の説明ポイントには、トタン屋根の日影が設けられているが、参加者が多人数になると、そこに全員が収まらないのが実情である。他には「船酔い対策で船内設備の工夫が必要」と「上陸できないときのフォロー（スライドや動画の映写と説明など）をターミナルビルで行う」が各2件、「外国人にも配慮した音声テープでの多言語対応」と「島内での説明グループを分ける入島証配布の手際の悪さの改善」が各1件あった。男女や学年に顕著な差異は無かった。「日陰を増設して安全確保に万全を期しながら見学場所の拡大を図る」というのが改善策としてまとめられよう。日陰の増設やモニターによる説明は難しくないとと思われるので、今後の改善に期待したい。

2. 長崎市内自由行動をめぐるレポートの分析

長崎市内自由行動に関するレポート課題は次の3点である。(1)「2日目の8月25日に巡った場所を訪問順に列挙してください。」、(2)「上記(1)のうち、印象に残った訪問地を1～3位の順に並べて示し、その理由を各々の訪問地の名称に続けて、81字以上、100字以下でまとめてください。ただし訪問地の名称は含まないものとします。」、(3)「上記(2)において1位のものについて、その魅力を一層高めるためにどのような方策をとればよいか。その提案を181字以上、200字以内でまとめてください。」なお、各課題において男女や学年による顕著な差異は見出せなかった。

(1) 訪問地について

受講生の訪問地については表1にまとめた。長崎の著名な観光スポットは、その大半を路面電車で巡ることが出来るため、全員に一日乗車券を持たせた。訪問地の分布をみると、訪問者が最多の18名であったグラバー園と長崎原爆資料館、これらに次いで14名の訪問者を集めた大浦天主堂、新地中華街、そして平和公園、さらに10名が訪れた孔子廟・中国歴代博物館と出島は、すべて路面電車の停留所から徒歩圏内のスポットである(図1)。

地形的な制約のもとに市街地を展開させた長崎は、古くから低地部分や山麓部に都市的機能が集積しており、そこが路面電車のサービスエリアにもなっている。こうした特色が受講生の訪問地にも反映されたといえる。宿舎から近い風頭山や亀山社中記念館は、初日の夕刻に訪問した場所として書き添えられた回答もあった。

(2) 印象に残った訪問地とその理由について

個々の場所を細かく記す紙幅は無いので、1位と回答した者を9名集めた長崎原爆資料館、1位との回答は2名ながら8人が2位に推したグラバー園、同じく1位との回答は2名にとどまったが2位と答えた者が4人に及んだ孔子廟・中国歴代博物館の3カ所についてレポートの内容を整理する。

1位評価が圧倒的に多かった長崎原爆資料館では、展示物のインパクト、展示の工夫、平和への願いが自然にわいてくることなど、当施設のもつ強い個性を正面から評価したレポートが、1位評価から3位評価までを通じて大勢を占めた。ただ、(3)で後述する改善点にも頷けるものが多いので、より優れた施設へ成長させていくための「伸びしろ」はまだ残っていると考えられる。

次にグラバー園についてみると、ここは観光スポットとしても宣伝活動が行き届いている施設にふさわしく、1位評価から3位評価までを通じて、洋館を間近に観られることを評価した回答が大半であった。長崎港をはじめとする園内からの景色の良さを指摘した回答も1~3位評価11件のうち5件を数えた。これはグラバー園がもつチャームポイントでもあるため、それが訪問者の心に届いた証しであるとみなせよう。

続けて孔子廟・中国歴代博物館では、1位評価と2位評価を通じて（3位評価は無い）、中国と長崎との関係の深さが良く理解できるという回答が3件、思想に触れられるユニークさを指摘した回答が2件、中国の先進性を理解できるとの回答が1件あった。長崎の文化形成に大きな役割を果たした中国は、「長崎くんち」や「長崎ランタンフェスティバル」でも色濃く独自の文化を発露しており、その常設的な展示施設が孔子廟・中国歴代博物館であると考えれば、1位評価が2件、2位評価が4件に及んだことも理解できる。

(3) 最も印象に残った訪問地の魅力を一層高めるための方策提案について

まず、9件の1位評価を得た長崎原爆資料館から記す。改善点の提案は3つに大別される。つまり、①「文字による説明が多過ぎるのももう少しシンプルに」や「海外からの来客に長崎の惨状を知ってもらうために多国語でのシンプルな説明を増強する」という展示方法に関する指摘が5件、②「原爆投下に至る国際情勢の扱いが不十分なので海外からの視点も織り込んだ方が良い」という展示の視点に関する指摘が2件、③「照明が暗くベンチも少ないので高齢者に不親切」や「順路が分かりにくいので説明もできるボランティア増員が必要」など施設の構造やサービスに関する指摘が2件、以上の3カテゴリーである。高い評価を得る施設においても一層の改善点を見出せる訓練をしておくことは、教員の養成にも資するところが大きいと考えられる。

次に、2件の1位評価を得たグラバー園と孔子廟・中国歴代博物館について記す。グラバー園では、「子どもや高齢者でも更に巡りやすいようなコースの設定」と「外国人観光客を念頭においた説明板の多国語表記の充実」が得られ、自身とは異なる属性の人びとに対する配慮がみられた。教育学部・教育学研究科の学生として好ましい傾向が滲み出ていると評価できる。他方、孔子廟・中国歴代博物館では、2件とも「高齢者や身障者に対する配慮が不足している。一層のバリアフリー化が必須」という趣旨の提案であり、社会的弱者に対するまなざしを持てている点が評価できる。

3. 佐賀（有明海干拓地）をめぐるレポートの分析

佐賀に関するレポート課題は次の1点である。「あなたが仮に佐賀市の小学校または中学校で地域学習を担当することになり、有明海干拓地を扱うことにした際、どのような点に留意して授業を設計しますか。私案を181字以上、200字以内でまとめてください。」

対象とする校種を明記した者はいなかったが、レポートの内容からすれば中学校を想定して書かれたレポートは4件で、他は小学校を想定していると考えられる。多様な授業設計が提案されたが、複数の内容を提案した回答を内容ごとに整理すると、2つの傾向に大別できる。

一つは「先人たちの知恵に学ぶ」という歴史的な意識のもとで干拓の歴史や時代背景を探り、さらに地理的な環境（干満差が大きい有明海の特徴、遠浅の干潟）との関連を考察させるという趣旨のもので、地歴融合を強く意識した内容である。全員がこの提案を行ったことは、現地説明をいただいた佐賀大学の五十嵐先生の専門が歴史地理学であることとも無関係ではあるまい。ここでは、減反政策にともなう土地利用の転換（栽培作物の変更）や他の干拓地との比較を組み込みたいとの提案をした者もいた。

もう一つは、生活科からの連続性、理科との教科間融合を図ることを意識した内容で14件の回答を得た。記された用語をキーワード的に記すと、干潟、生態系、ムツゴロウ、トビハゼ、ラムサール条約、環境などが列挙される。社会科の内容の中でも理科的要素を多く含む地理領域の特性が色濃く反映された結果であると判断できる。とくに教科バランスに優れた資質が要求される小学校教員を目指す学生にとっては、当地を訪問したことが大きな収穫になったといえよう。

4. 日本地理教育学会シンポジウムをめぐるレポートの分析

日本地理教育学会シンポジウム（於、佐賀大学）に関する課題は次の1点である。「あなた自身が奉職を希望する校種の社会科（小学校：地理的な单元、中学校：地理的分野）、または高等学校地理歴史科「地理」で、ESD的な教育をどう施していけばよいか。私案を181字以上、200字以内でまとめてください。」

まず、どの校種での試みであるのかを回答から読み取ると、小学校が4件、中学校が5件、高等学校が5件、校種を特定していないものが6件であった。これらの順に内容を整理すると次のようになる。

小学校を対象とした提案では、「家庭・学校・地域」のネットワーク構築、河川の上流から河口に至るまでの流域の諸環境、子どもの「遊び空間」の変容、林業を取り巻く諸環境の調整と討論が挙げられた。それぞれが現在の場所や時間に留まらず、空間的・時間的な幅の中で考える力を育む目標が立てられている点に注目したい。

中学校を対象とした回答では、フィールドワークの尊重が3件、地域を流れる河川の流域トータルの把握、身近な地域の文化継承への貢献が各1件提案された。河川流域も身近な地域も調査活動を伴う提案なので、すべてが知識蓄積型ではなく考察重視型を志向している。聴講したシンポジウムの影響もあろうが、国際地理オリンピックをみても地理教育のトレンドは考察重視であると同時にフィールドワーク重視でもある（香川 2013c）ので、提案の全てがグローバルスタンダードを反映していると解釈できる。

高等学校を対象とした提案では、フィールドワークによる観察・記録・分析・考察の積み重ね、現状把握から分析・考察を経て提案に至る思考様式、地域社会と国際社会の比較考察、資源・領土問題を題材にした政治的協調や粘り強い交渉、地理歴史科（地理、歴史）と公民科の2教科3科目を融合した問題解決能力、これらが各1件ずつ挙げられた。これらの提案を実現していくには、教科・科目にとらわれない複眼的思考力が問われるタフな授業設計が必要で、大学受験準備とは相入れないケースが多く生じよう。しかしながら、本来はこうした複眼的思考力に長けた人材を大学は求めるべきではないかと思われる。

校種を特定しない回答では、地域の利益や国益を考える際に何を我慢すべきかを考察させる、フィールドワークを通じて環境保全を考えさせる、エネルギー供給と消費を題材として環境保全を考察させる、環境問題を列挙させてその解決策を討議させる、国や地域の紛争を題材として歴史的背景の把握から問題点の洗い出しをさせて対立解消への糸口を模索させる、身近な地域と世界各地の類似点と相違点を指摘させ環境保全のあるべき姿をまとめさせる、これら6件の回答が得られた。校種は特定していないものの、期待している考察内容から判断すると、おそらく高等学校を主とした中等教育を念頭に置いた提案が多いと考えられる。

V. まとめ

今回の授業は、2006年に訪問（まだ本誌の記録に残していない2000年にも訪問）した長崎を中心にして、現地実習に初めて学会出席を組み込んだ欲張りなものであった。レポートに付記させた感想（記入は任意）を読むと、初日に端島（軍艦島）で日本の産業史の一断面と衝撃的に出会い、2日目に団体行動から解放されて行きたい場所を巡り、3日目は団体行動で干拓地を見てから日本地理教育学会に参加し、それぞれが多様な印象に残って充実したエクスカッションとなったようである。「長崎をもう少しゆっくり巡りたかった」という感想も少なくなかったので、見どころの多い土地を訪問する場合は、3泊4日の現地実習を設計するのも一案かと思われる。

ただ、その場合も事前学習の時間数は削減しない方が良いだろう。多くの受講生にとって、当初は事前学習会が相当な負担に感じられるようだが、長年にわたり受け継いできた方法は「面倒で苦しい一方で、それがあから現地実習が実のあるものとなる」という良き伝統となって定着した。一箇所にとどまって地域調査を行うインテンシブ調査の導入も含め、様々な模索をこれからも積極的に続け、地理（地理学）の特性を活かしつつ地歴融合や教科間融合に長けた学生を育ていきたい。

付記

本授業科目の設計段階から、とくに佐賀における現地行動に関わって、佐賀大学文化教育学部の山下宗利先生、佐賀大学全学教育機構の五十嵐勉先生に大変お世話になりました。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 2002年以降における現地実習の成果は、すべて翌年の「京都教育大学教育実践研究紀要」にまとめている。奇数年刊行のものは学部前期集中実施科目「地理学特講」（偶数年開講）、偶数年刊行のものは学部前期集中実施科目「地理学研究」（奇数年開講）の成果である。また、その大半は大学院前期集中開講科目「人文地理学特論」（毎年開講）と現地実習を共通実施している。授業実施年にしたがって現地実習の実施地域を列記すると、2002年：東京、2004年：日高・道央、2006年：長崎、2008年：道南・道央、2009年：松山、2010年：津和野・萩・石見銀山、2011年：高松・丸亀・琴平、2012年：八郎潟・白神山地・弘前・函館となる。
- 2) 本文で列記しておらず下記の「参考文献」欄に載っている論考は、事前学習会や現地指導の際に筆者（香川）が説明に用いたものである。また、紙幅の都合上、香川（2007）に記載した文献は、本稿の「参考文献」欄には記載していない。

参 考 文 献

- 茶谷幸治（2011）「まち歩きによる都市観光の質の転換」交通工学 46-1, pp. 27-31.
- 陳東華（2000）「資料 唐人屋敷と長崎華僑」社会文化研究所紀要（九州国際大学）47, pp. 111-118.
- 福島義和（2010）「斜面都市・長崎市のまちづくりの課題—1982年の長崎豪雨災害以降—」専修大学社会科学研究所月報 566・567（合併号），pp. 76-82.
- 後藤健介・後藤恵之輔（2012）「土砂災害・液状化の発生と地名由来—長崎大水害と東日本大震災—」自然災害研究協議会西部地区部会研究論文集 36, pp. 57-60.
- 堀場晶子（2004）「長崎チャイナタウンの発展とその背景」島根地理学会誌 38, pp. 23-40.
- 飯田謙一（2010）「地方自治体の中小企業育成に政策に対する一考察—長崎市の中小企業政策と関連させて—」専修大学社会科学研究所月報 566・567（合併号），pp. 44-58.
- 石川雄一（2007）「長崎県の港湾—長崎と佐世保 まちづくりと観光の視点—」地理 52-10, pp. 46-53.
- 香川貴志（2007）「長崎ばさるかんね—平成 18（2006）年度「地理学特講（地理学臨地実習）」「地域環境学臨地実習」の覚え書き—」京都教育大学教育実践研究紀要 7, pp. 1-10.
- 香川貴志（2013a）「義務教育で重視される項目をたどる北東北〜道南フィールドトリップ—2012（平成 24）年度「地理学特講」の覚え書き—」京都教育大学教育実践研究紀要 13, pp. 11-21.
- 香川貴志（2013b）「東日本大震災を受けての防災教育普及への取組み—さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証—」京都教育大学紀要 123, pp. 31-45.
- 香川貴志（2013c）「国際地理オリンピックに挑む—2012 年ケルン大会の結果から導出される日本の課題—」新地理 61-2, pp. 42-60.
- 囲 光（2008）「『長崎さるく』にみる観光資源の再発見」文化環境研究（長崎大学）2, pp. 82-91.
- 片寄俊秀（1984）「長崎豪雨災害その後」地理 29-6, pp. 29-37.

- 河地貫一（1984）「新長崎都市論—7.23 長崎豪雨災害の都市地理学的考察—」日本都市学会年報 17, pp. 84-102.
- 気象庁長崎海洋气象台（1987）「長崎県の気象災害」海象と気象 27, pp. 103-128.
- 隈部 守（1986）「わが町エクスカースションガイド 長崎市域における地形変化と文化」地理 31-4, pp. 140-144.
- 黒沢永紀（2013）『軍艦島入門』実業之日本社, 160p.
- 町田俊彦（2010）『『中核市』の人口・就業構造及び財政と長崎市』専修大学社会科学研究所月報 566・567（合併号）, pp. 21-43.
- 松井圭介（2006）「観光戦略としてのキリシタン—宗教とツーリズムの相克—」人文地理学研究 30, pp. 147-179.
- 松井圭介（2013）『観光戦略としての宗教 Sacred Sites for Tourism Strategy: 長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会, 182p.
- 森 隆行（2012）「長崎港を活かした長崎の活性化について」ながさき経済 632, pp. 1-8.
- 長岡信治・前田泰秀・奥野 充（1999）「長崎湾および長崎低地の沖積層と完新世の古地理変遷」第四紀研究 38-2, pp. 93-107.
- 長崎人権研究所（2009）「訪ねてみませんか？ 長崎の時間を歩く—原爆・部落・キリシタン—」リベラシオン（人権研究ふくおか） 135, pp. 113-122.
- 長崎県土木部河川課（2010）「長崎大水害と復興事業—治水対策と文化財の保全—」河川 66-5, pp. 31-35.
- 長崎県観光連盟（2007）『『新しい長崎』を見に行こう』林材安全 704, pp. 24-29.
- 長崎市観光宣伝課（2003）「長崎市のアジア観光客誘致について」市政 52-11, pp. 28-37.
- 長崎市建築部建築指導課（2013）「長崎市における老朽危険空き家対策とまちづくり」住宅 62-1, pp. 42-47.
- 長崎市教育委員会出島復元整備室（1998）「長崎再生出島復元」観光 387, pp. 32-38.
- 長崎市消防局予防課（2005）「行政当局側からみた防火管理—長崎市の火災予防対策—」防火 141, pp. 7-12.
- 西原 純・齋藤 寛（2002）「産業リストラクチャリング期における炭鉱閉山と三階層炭鉱労働者の帰趨—長崎県三菱高島炭鉱の事例—」人文地理 54-2, pp. 109-130.
- 岡本訓明・高橋誠一（2007）「長崎唐人屋敷の景観と構造」アジア文化交流研究 2, pp. 7-29.
- 大八木規夫（1983）「長崎の集中豪雨禍を振り返って」地理 28-5, pp. 78-85.
- 佐々木浩二（2010）「長崎県、長崎市の経済」専修大学社会科学研究所月報 566・567（合併号）, pp. 8-20.
- 柴田弘捷（2010）『『記憶』の無人島・軍艦島—炭鉱の島・長崎県端島—』専修大学社会科学研究所月報 566・567（合併号）, pp. 59-75.
- 高橋和雄・阿比留勝吾・福島武志ほか（1998）「長崎市の自主防災組織の結成に及ぼす地理的・社会的要因の分析」土木学会論文集 583, pp. 83-94.
- 高橋誠司（1988）「長崎市における高層建築物の立体的機能分化」東北地理 40-2, pp. 126-138.
- 筒井茅乃（2007）『娘よ、ここが長崎です—永井 隆の遺児、茅乃の平和への祈り—』くもん出版, 206p.